

残された子

——水害孤児の記録——

1 たよりになるのは、おばあさん一人

高森町高森北小学校六年

M・T

あのおそろしい水害にあつまから、もう二年。災害であらされたり、なくさ

れたりした田 畑はいつのまにかふっきゆう工事が多くは完成した。でもぼくは、田沢川の大きな石などを見るたびに、いつもあのおそろしかった二年前の六月二十七日を思い出す。

二十四日ごろから、しとしととふり出した雨は、一日まじに、こう水量がふえまいった。二十七日の日は、二時間か三時間か家へ帰った。田沢川の水は橋まどつかんとばかりにゴロゴロとすごい音をたてて流れていた。

帰った時はおかあさんはいなく、おとうさんがいた。おとうさんと、それがらおばあさんとで、かじゆえんにおいてある、はつどうきもちにいった。その時は、おとなりのおばあさんも、ひきにいって。

家に帰って、おかあさんが、おとうさんに、

「水が多くなるぞこいっま。」

といいに来た。ぼくはこれが最後に見る父母の顔とは思ってなかつた。そして出かけて、六時十五分ごろ、

「ドドーン」

というすごい音とともに、上の方から、

「まっぼう水がきたぞう。」

とこいっま、かけおりました。

夜中ごろ、有線が水をふせぎにいっすいた人たちで、ひなんしている人の名をいっすいた。でも、おかあさんとおとうさんの名は、なんどきいでも出てこなかつた。

もうその時、死んだというかくにんはとまもこくになって、その次の日、おかあさんの死体がみつかったから、ぼくのたよりになるのは、おばあさん一人だった。

その時から今までのくろうは、ひととうりではなかった。でもそれをなぐさめてくられたりするのには、近所の人達やはずましのマがみだった。

一生けんめいのこつまっている畑をたがやしたりするが、なんでおばあさん一人の手で、いくら一生けんめいやったと、どのくらいできよう。もしぼくがもっと大きかったらと思う。このようになかなしい災害の記憶を、ぼくもがわすれまいたい気持ちだ。

また災害にあった日が来た。

大きくなったらこういふ人になりたい

ぼくは、先生から大きくなったらどんな人になりたいかといつて、かいてきなさいといわれたので、かいてみた。

ぼくはこれが中学をどつきようして、高校へ行きたいと思つて、高校といつてもいいところへ行きたいと思う。そして高校をどつきようしたら、大学へ行きて、それからあと、どこかの会社へいきたいと思う。

でも、ぼくのゆめだ。

会社へ出たら、ぼくはたかになろうかな。

ぼくは機械ちようせつをする人になりたい。きかいというのは、とまもたの

しいものだ。ギヤアとか、えんじんのあと。どしま、その会社じゅうのいろい
 ろのきかいをどめたりうごかしたりがどきる。どまもたのしく思う。どしま
 もっともっときかいのことをたくさんべんきようしま、せっけい技しになりた
 いと思っくいる。
 ぼくは、大きくなったら今かいたような人になりたいと思う。(三十八年)